

西岡虎之助講義「国史学」にみる 戦中戦後の国学院大学人脈

海津 一朗

はじめに —473枚の紙背文書「聴講票」—

西岡虎之助が現代の歴史学にあたえた影響を、敗戦前の人間関係を復元することによって明らかにするというのが現下の課題である。西岡は和歌山県山村の次男で和歌山県師範学校を出て小学校訓導をつとめた後に東京大学の選科に合格して同史料編纂所教授になるという異色の経歴を持つ歴史家である。中世荘園史をホームグラウンドとしつつ、独自の史料論にもとづく民衆史研究の方法を創出した(海津他 2015)。

近年、今井修氏による西岡虎之助編『新日本史叢書』(全25巻・1936年)編集事業の追究、高橋秀樹氏による西岡虎之助の未刊著書『豪族三浦氏の研究』(1935年)の刊行が開始された。両氏の仕事は、西岡の出身母体である東京大学(周辺)の若手研究者との交流を具体的に明らかにしている(今井 2011・高橋 2021)。1932年の歴史学研究会創設、1960年の民衆史研究会創設はもとより、進歩的な歴史学・歴史教育の企画運営に深く関わった西岡は、戦中戦後を通して、人望の厚いオピニオンリーダーであった¹⁾。

和歌山大学教育学部歴史学ゼミ海津一朗研究室は、和歌山大学に寄託されている西岡史料の紙背文書のなかから、敗戦前夜の國學院大學(以下国学院と略記)での講義に関する史料を分析してきた。この研究のきっかけは、ゼミ生の小林真侑氏による西岡の講義ノートの発見である(小林 2020、小林他 2021)。その後、ノートの翻刻を進め、あわせて西岡史料のなかから講義関係史料の収集と分析を行なった。現在確認の終わった国学院関係史料は以下に分類できる。後述の如く、この三群はまったく別伝来の史料群である。

(1) 西岡執筆の講義台本ノート 1938年～1940年度

(2) 提出された国学院受講生の聴講票 1939・1941・1942年度の総計473枚

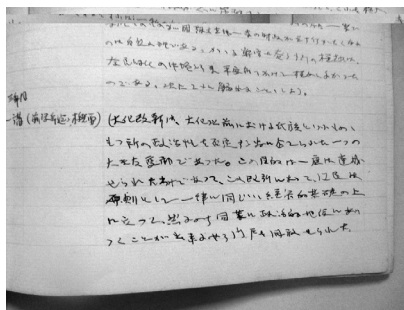


写真 1 国学院「講義録」三年目(1940年)
一講部分

(3) 国学院大学卒業論文審査員(甲乙)名簿 1940年度分

(1)については、解題を付して中核部分を翻刻して公開している(小林2020・2021、梅本他2021)。今回注目されるのは、敗戦後の歴史学になう次期世代の大学生が(2)(3)により復元されたことである。これまで西岡の相関人脈という、戦前の東京大学・同史料編纂所、戦後の早稲田大学など、進歩的な大学を中心に検討されてきた。今回の対象は、国学院という明治期の神道教授機関である皇典講究所を前身(1920年〈大正9〉に大学昇格)とした保守的体制的な組織であることが重要であるだろう。

1章 講義録による西岡虎之助講義「国史学(奈良-平安)」の復元

1節 「国史学」(奈良-平安)の位置付け

国学院サイドの記録に従えば、西岡の非常勤講師出講は、1937年後期から1942年度前期末の戦時繰上げ卒業時まで5年間、講義タイトルは「国史学(奈良-平安)」であった(西岡虎之助著作集刊行委員会(杉・今井)2010所引『國學院大學百年史』)。この「国史学」は、国史学科の必修科目(13単位)のひとつであり、共通科目として他学科の国文学科・道義科(哲学・倫理)にも開かれていた(戦前の国学院は全3学科)。ほかに「国史学(国史概説、上代-平安)」植木直一郎教授、「国史学(鎌倉)」龍肅教授、「国史学(国史概説、鎌倉-江戸)」渡辺世祐教授、「国史学(幕末-現代)」井野辺茂雄教授からなっていた。年次別の『國學院大學一覽』(現在の大学便覧類に該当)を参照すると、西岡は講師として、和田英松教授と連名で「国史学(奈良-平安)」を担当しており、1937年8月和田の死去により「昭和13年度」より単独での担当講師になっている。和田は著書『官職要解』などで著名な有職故実研究者で、西岡とは史料編纂所の同僚であった(享年73、職階は和田が業務嘱託、西岡が編纂官で上位)。

つまりこの科目は、今日の日本史概説(古代史)に該当する特論であり、重複履修が可能な通年授業であった²⁾(受講の詳細については2章で明らかにする)。

2節 西岡虎之助の国学院講義録

この「国史学」の講義内容については、講義ノートの発見によって全容が明らかにされた(写真1参照)。発見した小林真侑氏は、1938年～1940年にわたる講義ノートであり、国学院出講時の可能性が高いものとしつつも慎重に『講義録』と命名して大半を翻刻・公開した(小林2020)。年次比定はノート中にある「(1938年9月)」「前学期の終りに述べたやうに」「三年目」「前学年迄ノ概要」の注記から明らかにしており、1938年後期8講分、1939年前期3講分・後期5講分、1940年2講+ a 分(いずれも推定)が残されている。末尾はノートがいっぱいになったために補助紙を加えて増補して乱筆に終わっており翻刻が困難である。小林氏の年次比定が正しいとするなら、1940年は晩春に西岡が急性肺炎で倒れて危篤になった時にあたり講義が長期中断された年になる(西岡虎之助著作集刊行委員会(杉・今井)2010)。そのための断筆とみて間違いないだろう。

西岡の既発表論文とノートの照合を行った小林氏は、①学問研究に立脚した講義であること、②新出史料の増補など最新成果を盛り込むもの(そのため左ページを空欄とする)で、③年切の講義ではなく、長大な構想をもつ著作だったことなどの諸点を指摘している。

小林氏の指摘通り、ノート中には「第三章 地方氏族と新官職との結合による土豪の成立」「第三節 寺院の檀越等になる土豪」などの記載が見えており(小林他2021、13頁)、まごうかたない著書であった。講義ノートの残る1938～40年は、西岡が直接的な思想弾圧をうけた1938年7月2日(金)の直後の時期に相当する(海津2016の付録史料C)。西岡はこれ以後敗戦まで著書を出さなくなる。この時期に西岡が何を考えていたのかについては手がかりが非常に少ないため、この国学院講義の内容分析は重要になる。

3節 西岡の講義内容とその目論見

内容検討に入る前に、国学院の国史学という授業の位置付けと、中世史家の西岡がなぜ「奈良－平安」を分担したのかについて解説しておく必要がある。当時の西岡は東京大学史料編纂所の第二編部主任であり(1929～1948年)、同室に三浦章夫・桃裕行・家永三郎・相馬文子がいた(東京大学史料編纂所2001 3章1節職員録)。第二編は一条天皇の986年(寛和2)から1086年(応徳3)までを担当する部局で(院政期以前の「撰関政治」期)、国学院大での講義を始めた1937年には6巻を刊行

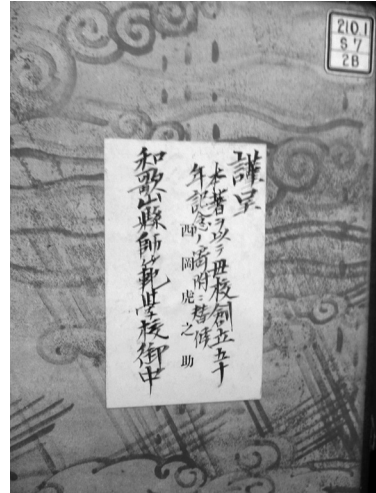


写真2 著書『奈良朝』初版

していた³⁾。また『日本文化史4 平安朝中期』(西岡1922)と『綜合日本史大系2 奈良朝』(西岡1926)の大著2冊を刊行している(写真2は西岡が母校師範学校図書館に寄贈した初版本、昨年「和歌山大学附属図書館リユース市」にて廃棄されたものを日本史研究室にて保管した)。両著はともに大系シリーズの1冊であり、奈良・平安時代を包括的に論じている。すでに岩波講座『日本歴史』2で「荘園制の発展」(1933年)を発表していた西岡であるが、当時は奈良－平安期の政治・文化史研究者として周知されていたのである。

講義ノートには前後に約1年分の欠損があるので完全な再現はできない。それでも、この授業に貫流している西岡の問題意識と視座は看取できると思う。この講義は、権力一般でなく中央・地方を問わぬ寺社勢家に視点を限定して、奈良・平安の間いかに変質していくのか、その変革主体を土豪(氏子・檀越)に見出して叙述するという構想をもつものである。『奈良朝』は、950ページに及ぶ大著であり、政治史・文化史・外交史(インド仏教伝来)が総合的に記述されたものである(のち上下分冊に)。だが講義では、これを全て捨象して舞台を寺社に絞り、「檀越」に着目して時代を切り取る。3年目の講義の冒頭では、「土豪の成立」を講義すると宣言した(第三章第三節「寺院の檀越

等になる土豪)」⁴⁾。「前学年迄ノ概要」を「地方にあっては豪族として発展延いては武士階級となり終に政治的権力を京都の貴の中から奪い取るといふことになった。」と確認した上で、「〔本講においては〕かかる課程を究明する手段は従って二方面あるわけである。一つは中央貴族を対象とするものであり、一つは地方の土豪を対象とする方面である。本稿にあってはこのうち専ら地方土豪に重点を置いてこれを見んとするものである。理由は従来主として中央貴族のことが調べられており、成書においてもその大要を伺ひ知ることが出来るに反して、地方土豪に関してはいまだ大いに明かにせられてないからである。」として三年目第一講に入っている(梅本他 2021・20頁)。

10年前の『奈良朝』では、聖武期の寺院整理令(「合寺の令」)を「檀越たちの横暴」という権勢家・寺社権力サイドから政策的に論じていた(西岡 1926、582-585頁)。だが、講義ノートでは、通年にわたって檀越である土豪の成長という下からの視座で淡々と実証し続けている(小林他 2021・14～16頁など)。『平安朝中期』でも、地方からの視点重視は確かに主張されていた。「結論一都鄙文化の交渉」として「屈服より葛藤へ！ 葛藤より征服へ！ かくて新日本が展開するのであつた。」と武士の地方文化に高いエールを送って結ばれていた。しかしそれは中央(貴族)・地方(武士)の図式的な理解に留まっていたといわざるを得ない。が、国学院の講義では「征服」過程を寺社と荘園から緻密に実証・挙例して説明するものに進化している。

このような評価の反転は、西岡の荘園制研究の進展に裏打ちされていることは明らかである⁵⁾。しかしそれだけではなかろう。古代寺社を舞台にしたのは「出講先の事情」を意識したに違いない。国学院は明治期の神道教授機関である皇典講究所を前身としており(1920年〈大正9〉に大学)、その学生には大社司祭者が多かった(具体的には2章参照)。もともと国家神道による国家奉仕という体制的色合いが濃い上に、西岡の出講した当時は「挙国一致」の掛け声に応じて教員組織を軍隊組織にあらためていた(1941年に学長は報国隊長、研究科長は大隊長など)(國學院大學(横山) 1982)。このような時に、西岡はあえて大寺社が中世権力に転換する過程を在地勢力の側から講義したのである⁶⁾。その司祭者の末裔たちに意識的に問題を投じたと思われる⁷⁾。

2章 「国史学」受講生の復元

1節 国学院聴講票の分析

西岡史料の紙背文書中から国学院「国史学」の聴講票473枚が一括伝来した。一般に西岡の紙背文書は文書筆写の要からB5大の裏白紙が大半である。だが、聴講票は偶然にも大分県の近世農村人口を分析する過程で手札状の用紙が必要とされたために伝来した(1枚に1家族の系譜をまとめてカードに括る)。表の筆写文書自体も、未刊の業績(近世人口家族史)であり、典拠史料自体が確認できない(この論文の公開後に関連諸機関に照会したい)。まず取り急ぎ紙背文書(史料本来のカード)の確認をする(写真3)⁸⁾

写真3に見る如く、「昭和××年度聴講券」と年次を印刷し、「擔任教員名」「聴講科目」「前年度聴講ノ有無」「姓名」「同上 ローマ字・片假名」「生年月日」「入学年度」「所属学科」「届出年月日」の空欄をつくる。聴講とあるが、受講の意味で今日の聴講生のためのものではない(國學院大學〈横山〉1982、國學院大學1937)。重複履修のチェックのために前年度受講を問う(ただしここの記載は実際の年度と齟齬しており、あまりあてにならない)、入学年と生年月日があるため分類に益が多く、特に生年は人物の特定にとっては非常にありがたかった(後述)。

届出年月日には、受講年の4月・5月の日時が記されており、登録の締め切り日だったこと、直接講師に提出するシステムであったことがわかる。なお姓名について、昭和14年度と16年度の聴講券は「同上ローマ字」とし、昭和17年は「同上片假名」に変わる。教員組織を軍事組織名に変えたという1941年の国策迎合とも関わるのであろう。

まず、受講生全体の概要をみておくと表1のようになる。西岡の教えた5年間8期のうち、受講票ののこる3年間でのべ473人が受講し、2回以上の重複履修者は203人に及ぶ。1938年・1940年の両年度については、翌年度の受講票に「前年受講の有無」欄があるので、一応の目安として表1に参考の数値を入れておいた。これに拠るなら、西岡講義期間中の受講者は582人という数字になる。ただし1940年は前述のとおり西岡が倒れた年であり、開講はしたものの不十分な内容に終わったと思われる(代講者は明らかでない)。

表1にみるごとく、開講時の1938年は、1年生が受講できない科目だった。

表1 受講生の登録人数分布（○は学年）

入 学 年	(1938授業)	1939授業	(1940授業)	1941授業	1942授業
1935		⑤ 1			
1936				⑥ 1	
1937	②24	③27			
1938	① 0	②57	③ 1	④ 1	
1939		①47	②40	③41	
1940			①44	②55	③46
1941				①75	②61
1942					①60
年不明1人					
総 計	参考24	132	参考85	173	167

受講者のべ総数473人（うち重複履修者203人）

年次を経るごとに、右肩上がりで受講生の増えていく傾向がわかる。「国史学」は全部で5つの分野が開かれており、そのなかで相当数のリピーターが居たという事実は、西岡の影響力を考える上で重要だろう。学生の将来にとって切実な神社経営の歴史を扱ったという西岡の目論見が的中したのではあるまいか⁹⁾。

表1の数字のみでは具体的な客体が捉えにくい。全受講生の一覧を出して出身県・人脈を考察すべきだが、ここでは傾向をみるために公開された研究教育上の著作(本など)をもつ受講生を年次順に列挙して補足しておく(表2)¹⁰⁾。

1938年～1942年入学の受講生270人(のべ473人)のうち、2割を超える64人が著作(本)を残している。著作には奥書・著者紹介に生年を記すことが多いので、作者を特定するに際して、聴講票にある生年月日欄が大きな力となった。それでも見落としも多いと思われるが、この比率は大変な高率である。国史学科・国文学科・道義科(倫理・哲学)3学科の受講生であり、人文分野の業績、外国文学・哲学の翻訳紹介、小説から思想史・人物伝まで幅広い¹¹⁾。このうち国史学科の出身者の著作には共通する特徴がみられる。これについては、次章にて検討したい。同時期の他の高等機関との比較が必要となるが、国学院卒業生のもつ社会的な役割の大きさが特筆に値しよう。

表2 学術的著作を持つ受講生一覧

国学院大学 西岡「国史学」受講生 履修欄○が2度◎が3度

入学年	氏名	生年	履修回数	著作アリ	
1938	池田駿一	大正7		儒教ルネッサンス(1989)	
	大川廣海	大正8		出羽三山の四季(1984)	
	乙益重隆	大正8		石障系石室古墳の成立	
	河野武夫	大正6		兵庫・広石村史	
	菊池武雄	大正6		別記(写真3)	
	鈴木正一	大正5		私たちの郷土阿知ヶ谷村誌(1969)	
	千家遂彦	大正7		別記	
	谷口寛	大正5		現代神職教養読本(1984)	
	中野眞琴	大正7	◎	あじす史話(阿知須1969)	
	中村春壽	大正7		日韓古代都市計画(1978)	
	古川哲郎	大正6		雑誌経国・雑誌海と空	
	三島安精	大正7		校註二十一社記(1943)	
	森川馨	大正4		森川勘一郎 編志野・黄瀬戸・織部(1936)発行者	
	1939	佐藤司	大正6	◎	教育権の理念と現実・現代法選書19(1989)
杉山博		大正7		別記(写真3)	
筑紫申眞		大正9	◎	アマテラスの誕生(1962)	
常岡悟郎		大正6	◎	タイの文化(1942)	
野村裕		大正8	◎	解放の福音イエス翻訳(1987)	
松井新一		明治41		宗教と平和:教壇生活の体験を通して(1981)	
宮崎芳樹		大正8	◎	雑誌刀剣美術	
森 彬		大正8	○	御坊市史(和歌山県)(補註)	
北構保男		大正7	◎	古代オホーツク文化の源流(1978)	
赤間太郎		大正8	◎	雑誌上代文化(國學院大學考古學會)	
池田秀夫		大正9	○	富岡・甘楽の伝説(2009)	
山田稔		大正9	○	織る・三河女子高等専門学校(1977)	
1940		秋山光男	大正8		日本刺繍(1975)
		岩崎正夫	大正8	○	日本の地質8四国地方(1993)
	小川信	大正9		別記(写真3)	
	加地春彦	大正9	○	連作山の団扇より夏志賀径(1946)	
	後藤元彦	大正9	○	祇園帖(1946)	
	永島 保	大正9	○	地球は満員(1978)	
	橋本忠夫	大正10	○	魔霊・翻訳(1942)	

	長谷川弘道	大正10	○	雑誌史学研究集録
	藤井文雄	大正7	○	高千穂興隆師座談概要筆記(1937)
1941	岡本健児	大正9	○	高知県の考古学(1966)
	岡本徳重	大正11	○	米寿記念岡本徳重作品集能面百選(1997)
	川崎英太郎	大正8	○	浄泉院小史・附集軒庵略記(1961)
	小泉富太郎	大正9	○	日本刀全集(1966)
	五味典夫	大正10	○	民俗伝承(解説)(1943)
	佐久間昇	大正8	○	奥州軍談(1975)
	佐野大和	大正10	○	瀬戸神社(1968)別記
	島重海	大正10	○	出雲神話の世界〈若い世代と語る日本の歴史3〉(1975)別記
	杉山英雄	大正11		新進之伯刺西爾：独立百年記念(1922)
	鈴木秀麿	大正10	○	神宮司庁広報誌瑞垣42(1959)
	高橋正行	大正10	○	俳句の本豆本(1979)
	高藤昇	大正10	○	講座日本の神話 5 (出雲神話)(1976)
	手塚末松	明治38	○	雑誌史流 1 (1958)
	永久保武	大正9	○	職業指導読本(1953)
	中野正徳	大正6		大野山：大野城・四王寺をめぐって(1976)
	野口光敏	大正10	○	日本の民俗 愛媛(1973)
	馬場敬一郎	大正8	○	江戸時代の刈谷の人々：武士の勤めと城下の営み(1980)
	村上一郎	大正10	○	北一輝論(1970)
	山口常助	大正9	○	予陽叢書本「宇和旧記」「吉田古記」「宇和郡記」について(1971)歴史学研究投稿
	辻彦三郎	大正10		藤原定家明月記の研究(1977)
	松本光雄	大正9		雑誌史学雑誌65-8(1956)
1942	青木次彦	大正11		同志社大文化学論集37に退官記念論集(1988)
	小原秀夫	大正11		雑誌信濃名族 1 (1974)
	蒲生俊仁	大正10		雑誌桃李6-6南北戦争と奴隷解放
	川井清敏	大正10		トピカル切手の集め方(1980)
	鈴木重慶	大正9		近代農業の先駆け鈴木重慶伝(1997)
	高橋芳夫	大正10		高橋芳夫遺歌集(1992)
	竹内利美	明治42		竹内利美著作集全3巻(1990-1991)別記
	松本一郎	大正11		筑豊の炭鉱札(1988)
	矢島正治	大正9		現代イギリスの小説研究(1973)
	四柳嘉孝	大正11		能登半島年中行事(1960)

2節 国学院「学部卒業論文題目一覧」の分析

以上は、受講生の概況であるが、西岡の国学院での教育はこれにとどまらない。西岡史料中の莊園番頭関係文書を抜き書きした冊子の紙背文書から、「國學院大學・学部卒業論文題目一覧」（昭和15年3月卒業予定者）計5丁が確認された。これには、昭和11・12年度入学者の109名(学科内訳は道義5・国史59・国文48)の卒論名が列挙されて、甲乙の審査員(主査・副査に該当か)が示されたがり印刷の史料である。おそらく当該学生全員に配布されたのではないか。

表3 1940年度卒業生の卒論指導・西岡虎之助関係

入学年	氏名	生年	卒論 審査員	タイトル抄	出身(大学一覧 より)	共／審査員
1936	後藤 昂	欠	西岡 甲	正倉院文書を中心として奈良時代の食物研究	○鳥根 松江中	植木直一郎
1937	井内昌治	大正8	西岡 甲	祖谷を中心とせる吉野川上流山地の社会史的研究	○徳島 阿波中	今井時郎
1937	鈴木隆信	大正6	西岡 甲	野武士について	○愛知 豊橋中	高橋隆三
1937	外垣豊重	大正6	西岡 乙	古古に於ける姓氏制度の推移	○長野 鹿島中	植木直一郎
1937	且理梧郎	大正4	西岡 甲	寄進又救済を中心として見たる奈良時代豪族の経済的活動形態	○宮城 白石中	幸田成友
1937	木宮之彦	欠	西岡 甲	奮然の研究一主として其の隨身品と将来品に就いて一	○欠	花山勝信

奈良時代の社会史・経済史・政治史3本は西岡の講義主題であり(特に井内論文は土豪がテーマ)、中世在地武力・中核的な渡航僧・地域「社会史」の論文は先駆的な課題であり、今日の研究テーマとしても色あせないものである。活字に残ったものは確認できないのだが、研究題目よりうかがうところ、いずれも西岡の講義の影響を濃厚にうけたものと推測できる。国学院の研究者組織を知る参考として、国史科の59名を審査した担当教員28名の名を挙げて

昭和十四年度聴講券

擔任教員名	西岡虎之助先生
聴講科目	国史学
前年度聴講の有無	無
姓名	藤池 武彦
同姓上字	Kikuchi Takeo
生年月日	明治6年8月11日
入學年度	昭和13年度
所屬學科	国史學科
届出年月日	昭和14年4月30日
備	
考	

昭和十四年度聴講券

擔任教員名	西岡虎之助
聴講科目	国史学
前年度聴講の有無	ナシ
姓名	杉山 博
同姓上字	Sugiyama Hiroshi
生年月日	明治27年8月9日
入學年度	昭和14年度
所屬學科	国史學科
届出年月日	昭和14年7月20日
備	
考	

57
昭和十六年度聴講券

擔任教員名	西岡教授
聴講科目	国史学
前年度聴講の有無	有
姓名	小川 信
同姓上字	Onuma Nobuhiko
生年月日	明治29年12月21日
入學年度	昭和15年度
所屬學科	国史學科
届出年月日	昭和16年4月28日
備	
考	

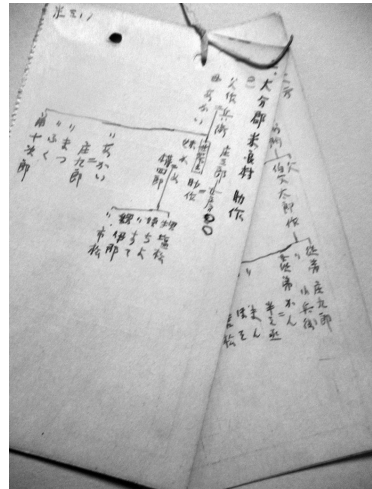


写真3 西岡虎之助「国史学」の「聴講表」
(右下は表面の西岡メモ)

おきたい(リスト登場順、◎印は東京大学にて学位をとった国学院出身者)。

西岡虎之助 植木直一郎 山本信哉◎ 河野省三 渡辺世祐 志田不動磨
今井時郎 大場磐男 高橋隆三 加藤玄智 萩野仲三郎 井野辺茂雄◎ 高
柳光寿 河鱒実英 岩崎小弥太 花山信勝 入沢宗寿 白鳥倉吉 小柳司氣
太 幸田成友 龍 肅 市村瓊次郎 武田祐吉 内藤智秀 佐伯有義 宮地
直一 田中義能 筧克彦

残念ながら、見つかったのは1939年度卒業予定者の分のみであるが、必修授業の講義と専門指導とが連動した教授システムであったことがわかる。単に教養教育段階の講師というだけではなかった。このなかから、西岡史学を継承する國學院群像が現れてくる。

3章 国学院「国史学」受講生と戦後歴史学

1節 日本中世史分野のアカデミズム史学

受講生のなかに、敗戦後の日本中世史の土台を支えた人々が見いだせる。菊池武雄・杉山博・小川信の3者は、いずれも不世出の中世史研究者であり、ありきたりな紹介はあまり意味がない。西岡との関係に絞った略伝をまとめて、その上で考察したい。

菊池武雄(1917-1974年)1941年に卒論「吉野朝時代公家社会世相と洞院公賢」を書いて国学院を卒業し、同年に東大史料編纂所に入所したが兵役に取られシベリア抑留を経て復員し1948年1月に復帰した(47嘱託48補助員49事務官56助手68助教授74教授)。古文書部に属し、東大寺文書の編纂を担当し、佐藤和彦・小山靖憲をはじめ荘園史・民衆史研究者に大きな影響を与えた。『歴史学研究』166号の「戦国大名の権力構造—遠州蒲御厨を中心として—」(菊池 1953)は惣村研究の起点となる研究として読み継がれている(掲載の経緯は歴史学研究会 2012、341頁を参照)。また、菊池の実家は和歌山県湯浅町栖原の豪商の垣内家で、父の菊池海荘が江戸で家業の砂糖・薬問屋を成功させて、幕末の海防・殖産など政治活動で渡辺崋山、佐久間象山、大塩平八郎、陸奥宗光らと親交を結んだ(菊池の事績は福田 1975を参照した)。

杉山 博(1918-1988年)東京大学名誉教授。1941年国学院卒業、卒業論文「中世末期に於ける夫役に就て」。兵役・帰国後に国学院図書館司書をへて、1947年東大史料編纂所勤務(47嘱託48補助員49事務官58助手66助教授72教授)、1976年から駒澤大学文学部教授。1951年地方史研究協議会の創立に加わり、自治体史の組織に尽力した。『荘園解体過程の研究』(杉山 1959)は備中国新見荘の土一揆を主題とする論文集。西岡虎之助等監修の『郷土研究講座』(西岡 1957・1958)、西岡編『図説世界文化史大系21 日本Ⅱ』(西岡 1959)を分担執筆した。

小川 信(1920-2004年)國學院大學名誉教授・室町政治史の専門。1942年9月国学院卒業。10月応召・シベリア抑留をへて1948年5月復員。高校講師・教諭をへて国学院大学院入学し、1967年同大専任講師。その間1950年金剛峯寺文書を用いた「紀伊国鞆淵庄における郷村制形成過程」(小川 1950)を発表。没後の『日本歴史』「学界消息」には湯山賢一氏が「処女論文は復員直後の混乱の時代、お米をリュックに山越えて現地調査を行ったことより纏めた」と記した(湯山 2005、140頁)。私の世代にもっとも感銘を与えたのは、最晩年におけるジグゾーパズル並みの高幡不動胎内文書を復元した際の執念である。これで東國中世史が自立した(佐藤 2000、IV 8 論文〈初出1993〉)。

以上、西岡との関りを軸にして圧縮した略伝記であるが、まとめるなら次のようになるだろう。菊池は和歌山との関りが深く、小川は紀伊半島の山間荘園を処女論文にしていた。また、3人ともに太平洋戦時に学徒動員で戦地に送られて死線をさまようが(菊池・小川はシベリア抑留)、帰国ののち菊池・杉山は西岡のいる東京大学史料編纂所に復帰した。

東大寺文書を精査して惣村研究の始祖とまで評される菊池は、同じ職場の後輩の民衆史・社会経済史の福田栄次郎・佐藤和彦・小山靖憲らに大きな影響を与えた。寡作である菊池の業績が私の世代に広く深く刻印されたのは、こうした研究者の発信力によるものである(このうち早稲田大学出身の佐藤和彦は西岡の直弟子である)¹²⁾。備中国新見荘の研究では史料を博搜して「祐清塚」を発信した杉山は、地域に根差した荘園研究の手腕をみせた。西岡の編纂する講座シリーズを数多く分担執筆している。特に編者西岡が体調不良だった角川書店の『郷土研究講座』全8巻では、締め括りの「江戸時代における地誌の目録」を執筆するなど随所で西岡の片腕として活躍した(西岡 1933、この原動力は地方史研究協議会を立ち上げた地域史研究に根ざしている)。3人のなかでは仕事の上で西岡にもっとも深くかわり、影響された人と言えよう。高校教員時代に紀伊国鞆淵荘を主題とした小川にも同じ問題意識が見受けられるが、紀ノ川筋をフィールドにした理由については語られていない¹³⁾。研究課題(荘園)・郷里の紀州(地域)・職場(史料)をめぐり、この3者は西岡と分かちがたく結びついていたアカデミズム学者だったのである。

2節 「国史学」受講生の在野史学潮流

以上は西岡の専門と関りの深い、戦後歴史学を牽引した「巨星」である。

だが、表2の著作をあらためて通覧した際、国学院学生に特有とも思われる傾向がみられる。それは一言でいうなら地域社会誌ともいべき在野史学の系譜である。国学院の国史学科で、考古学・民俗学・宗教史を専門に学んだ人々が、地元に戻って宗教者や教員など知識層として文化財の保護・活用を通じて地域づくりの担い手になっていく。リストの中には郷土自治体の資料集に該当するものが散見する。もちろん、中には竹内利美のように、小学校教員から大学教授になった碩学もある(農村漁村社会学)。このような在野の層が、のちに発掘技師・博物館学芸員・市町村史職員に展開して、戦後の歴史学のすそ野を広げた人々になったことは間違いない。西岡は、杉山博や大場磐雄(国学院教員)らとともに郷土史研究・文化財保存の企画を重ねて世に出した。明らかにこのような在野史学を意識した取り組みであろう。

国学院は社寺の関係者が多いが、リストの中で気づいたのは佐野大和である。中世六浦荘(首都鎌倉の外港)の瀬戸神社神主佐野大和は、考古学を専門としている。『瀬戸神社』(佐野1968)など地域史に関わる著書もある。先の杉山博と同様、西岡虎之助が編集する地域史研究の叢書(西岡1957)に「発掘のしかた」を分担執筆している(これは、監修者に西岡と並んで国学院出身の考古学者大場磐雄がいるためと思われる。大場は「遺物のとり扱い方」を担当)。この時郷土史研究普及の一翼を担った佐野大和の名は、1980年代半ば横浜市の上行寺東遺跡保存運動時に脚光を浴びた。運動に際して、地域史(文化財・景観)を深めた地元研究者として多くの若手中世史研究者たちの記憶に残っている(遺跡自体は1986年に横浜市が破壊)。

1938年入学の千家遂彦は、名前の通り、出雲大社の司祭家である。石塚尊俊 編『出雲信仰民衆宗教史叢書15』には、西岡「国造の土豪性と大社領」・石塚「出雲信仰と御師 出雲信仰の沿革」とともに千家遂彦の「出雲信仰と御師の廻国」が収録されている。神社信仰の民衆的基盤を具体的に論じた仕事である。これ以外にも、国学院の学生には島根県の出身者や出雲大社を研究するものが多く、島重海『出雲神話の世界』評論社版〈若い世代と語る日本の歴史〉のように良心的な企画(新書版)の執筆者もいる(島1975、他中世執

筆者は井上良信・永原慶二ら)。国学院の島根人脈(研究蓄積)を見直しておく必要があるだろう。

このように、大社の子弟たちが国学院に学んで、その成果を地元を持ち帰っていく。もちろん中には別個の立場に振れていくものもあるだろうが、西岡の「骨太な郷土愛」に学んだ成果は確実に広がったはずである。西岡の築いた国学院人脈とは、中央アカデミズムと地方在野史学とをつなぐ役割を果たしていたと評価されるのである。ここでは、著作の形で足跡を残した人々にしか言及できなかった。当然のことだが、この形では姿を残さなかった人々の中に、地域のオピニオンリーダーがいたであろうことは揚言するまでもない(補注)。

おわりに 一西岡史学の後継者たち一

西岡の講義「国史学」の内容を踏まえて、その受講生を復元・分析した本稿の結論は次の二点に集約される。

(1)「国史学」の受講生には、敗戦後の中世史学の開拓者である菊池武雄・杉山博・小川信が確認され、3者はともに学徒動員の戦場体験、西岡の郷里紀州との関わり、東京大学史料編纂所での勤務など共通する地盤をもって、荘園史・村落史・民衆史など西岡史学の主題を継承・発展させた。アカデミズム史学の幅を広げた研究者であった。

(2)「国史学」の受講者の多くは、教員・文化行政や宗教者として地域に入り、郷土史誌はもとより考古学・民俗学・文化財などの学識リーダーとして地域づくりを主導した。戦後の西岡は、「国史学」受講者の協力も得て、「郷土史研究法」「文化史講座」のシリーズ本を多数出版企画して、在野史学の地域社会誌育成につとめた。

以上の点は、これまで西岡史学の研究であまり指摘されてこなかった側面であろう。特に二点目の在野史学への視座は、長くアカデミズムの中心「象牙の塔」を職場とした西岡が何処で獲得したものだろうか¹⁴⁾。「国史学」・卒論指導をはじめとする国学院人脈との接合こそがその手掛かりになるのではなかろうか。今回明らかにできた「国史学」復元がいかほど実態に迫っているものか否か、ここから先は、国学院関係者の追試に委ねたい。海津研究室

では、大正大学の講義録「中古土地経済史」の翻刻、日本女子大学での講義教材の同定など、西岡史学のさらなる人脈発掘に駒を進めたい。

註

- 1) 和歌山の山村に生まれ、和歌山県師範学校に学んだ西岡虎之助が、教員養成の諸科目を学び、小学校教員の体験をするなかで独自の歴史学研究法を身に付けたことについては、和歌山大学紀伊半島価値共創基幹KII-PLUS紀州経済史文化史研究所の2回の展示で明らかにしてきた(海津他 2015)。その手法は、民衆史の研究を可能にし、結果的に平泉澄を頂点とする官学アカデミズムの皇国史観に対峙することとなった。それゆえに敗戦後は、学問・教育の両面において主導的な牽引力を発揮することになった。
- 2) 国史学科必修科目としては、国史学5つのほかに、日本法制史(植木直一郎)、東洋史学(三分野)、西洋史学(三分野)、史学研究法(内藤智秀)、古文書学(岩橋小弥太)があった。
- 3) 西岡の第2篇部主任在職当時(1929-48)、戦時中ということもあり編纂活動は活発とはいえない。大日本史料2編の5(1934年12月)、6(1937年3月)、7(1943年1月)、8(1953年2月)、9(1954年3月)。ただし敗戦後の8以後はそれ以前の半分以下の薄い装丁にかわる(他編も同)。
- 4) 西岡は講義の1年分を1章、1～2・3回分を1節と考えて執筆したようである。袖に「第〇講」とあるのは、3～4ページごとの段落に便宜的に記載しており、必ずしも議論の終末部とは限らない。
- 5) 和田英松死去に伴う後任であり、この年10月には「荘園発生における二つの方向」を国史学会で講演した。同様の講演を各地で行っており、当時の西岡の関心は荘園に他ならなかった。
- 6) この点で、先行研究が西岡による「中世的世界成立の構想」と評したのは正鶴を射たものとする(小林 2020、48頁)。ただ筆者は古代史の専門ではないので今日の学説史上の西岡古代史研究の意義は問えない。あくまで10年前の段階の通史叙述と、1930年代の講義内容との比較という点から論じたことをお断りしたい。
- 7) 西岡の非常勤先での講義内容は、きわめて政治的・意識的に選択されている。日本女子大において女性史を講じている。国学院での事例もこれに加えられるだろう。西岡は契約先での役割を熟慮した誠実な教育者であった。
- 8) 表の人口研究と紙背の聴講票との関係では、票が「足らなかった」点が重要であろう。

名刺や招待状(裁断)を74枚分補充しており全体の2割に相当する。したがって、西岡は手もとに残っていた復古の聴講票すべて使って家族人口史研究をすすめ、足らずに補充した。したがって、昭和14・16・17年の3か年度分は「散逸がなく」完全復元できるという前提で考察したい。

なお表の人口研究であるが、近世(年紀不明)の大分県南部の村の人口を集計したもので、世帯主(家長)の性別・身分を明らかにしたものである。挙証史料の所在は特定できずこれに該当する論考も見つかっていない。大分郡・玖珠郡17カ村の215世帯のうち半数に迫る90世帯が女性の世帯主を推しているという結論である。検算を要する。

- 9) この作業は2021年前期ゼミの日本史演習で行なった。4 回生林田和樹、3 回生西島野々華、宮前大地、古崎紀佑が分担して林田が取り纏めた。たかだか500枚足らずの史料と思われるかもしれないが、聴講票は紙背文書であり、西岡は表の記述(内容は註8参照)に従って小分けの付箋や括りをしていて実際の作業は困難を極めた(写真3)。
- 10) 作表にあたって、受講者全員について〈日本の古本屋〉検索サイトを縦覧して、ヒットしたものについては〈国立国会図書館オンライン・リサーチ〉により詳細検索した。縦覧作業のほうは、ゼミ生の林田和樹氏が担当した(サイトの選択も同氏の発案である)。表には代表著作として研究分野および地方性のうかがわれるものを選んだ。
- 11) 受講生のうち、1937・1938両年度の卒業生については、高野山大学図書館が『國學院大學一覽』当該年分を所蔵しており閲覧することができた。これにより、誕生年と共に出身県・中学校が明示されている。37年度卒業生には2人の和歌山県出身者がいるが、西岡の卒論指導者には入っておらず、いまのところ相関は問えない。全受講生について出身・卒論タイトルと審査者を明らかにする方法を検討したい。
- 12) 佐藤和彦は2006年5月13日に和歌山県立図書館のシンポジウム中に客死するが、その場における最後の発言は菊池武雄業績を軽視した報告者集団への批判であった。『立正史学』2006年報に全文掲載(海津ゼミ〈当時〉野田阿紀子氏のテープ起こしより)。
- 13) 本稿では、直接・間接問わずに「思い出話」「覚書き」の類は(書き残されたものも含めて)原則的にすべて排除した。西岡紙背文書の記載内容に限定した。
- 14) 西岡自身は、和歌山大学(当時和歌山県師範学校)に学んだ際は、「つまらない授業ばかりでサボって図書館に居たが、三雲先生の国史の授業は興味を持った(取詮)」と述懐する。三雲猪吉郎の授業は秀吉の朝鮮出兵に始まっていたことが確認されている(海津2015 4-5頁)。西岡自身が、初学の学生にとって一人の教員の授業のもつ重みを実

感した人だった。また、国学院で郷土研究が本領となっていたことについても、西岡自身が、小学校訓導として四郷小学校で郷土教育運動を体験する。これは全科目にわたって科学的な観察を重視して、伝説など皇室権威を否定しかねない先進性をもつ教育であった(もっとも西岡はまじめに授業した形跡がないのだが。諸説あり)(海津他 2015、12-13頁)。かかる西岡自身の教育・研究環境と原体験が、在野史学への理解と関心にいかに関わっていたのか否かは留保したい。

所引一覧〈個人〉

- 今井修「西岡虎之助と『新日本史叢書』」『歴史評論』732、2011
- 梅本竜馬・中出考為・林田和樹・三谷聖和「西岡虎之助『講義録』にみる1938年の西岡史学」和歌山大学教育学部『学芸』67、2021
- 小川信「紀伊国鞆淵庄における郷村制形成過程」『国史学』52、1950
- 海津一朗「西岡虎之助コレクションの全体像についての覚書」『和歌山地方史研究』60、2011
- 海津一朗・吉村旭輝編『西岡虎之助 民衆史学の出発(たびだち)』和歌山大学、2015
- 海津一朗編『西岡虎之助神話 故郷と絵図』(JSPS課題番号25370773「西岡虎之助蒐集中心世絵画史料コレクションの復元と模写技法の基礎的研究」)、2016
- 菊池武雄「戦国大名の権力構造—遠州蒲御厨を中心として—」『歴史学研究』166、1953
- 小林真侑「西岡虎之助『講義録』にみる1938年の西岡史学」『紀州経済史文化史研究所紀要』41、2020
- 小林真侑・海津一朗・山村恭平「未発表の西岡虎之助『講義録』(1938年分)全文紹介」和歌山大学教育学部『学芸』67、2021
- 佐藤和彦『中世社会思想史の試み—地下の思想と営為—』校倉書房、2000
- 佐野大和『瀬戸神社』小峯書店、1968
- 清水長一郎『森彦太郎先生傳』常磐義塾、1952
- 島重海『出雲神話の世界』評論社、1975
- 杉山博『庄園解体過程の研究』東京大学出版会、1959
- 高橋秀樹「西岡虎之助著『豪族三浦氏の発達』の刊行経緯とその意義について」『三浦一族研究』25、2021
- 西岡虎之助『日本文化史4 平安朝中期』大鐙閣、1922

- 西岡虎之助『綜合日本史大系2 奈良朝』内外書籍、1926
西岡虎之助『莊園制の発展』『岩波講座日本歴史』2、岩波書店、1933
西岡虎之助『豪族三浦氏の研究』（未刊）1935
西岡虎之助編『新日本史叢書』全25巻 内外書籍、1936
西岡虎之助他監修『郷土研究講座7 研究方法上』角川書店、1957
西岡虎之助他監修『郷土研究講座8 研究方法下』角川書店、1958
西岡虎之助編『図説世界文化史大系21 日本Ⅱ』角川書店、1959
福田栄次郎『菊池武雄氏の逝去を悼む』『歴史評論』297、146頁、1975
森彦太郎編『和歌山県日高郡誌』和歌山県日高郡役所、1923
湯山賢一「学会消息」『日本歴史』632、2005

所引一覧〈組織・団体〉

- 國學院大學『國學院大學一覧 昭和十二年度』國學院大學/望月印刷所 1937(10月)
國學院大學『國學院大學一覧 昭和十三年度』國學院大學/望月印刷所 1938(10月)
國學院大學(横山晴夫)編『國學院大學百年小史』國學院大學、1982
東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所史料集』2001
西岡虎之助著作集刊行委員会(杉仁・今井修)編『西岡虎之助年譜・著作目録〈補訂版〉
(稿)』、2010
民衆史研究会編『民衆史を考える』校倉書房、1988
歴史学研究会編『証言戦後歴史学への道』青木書店、2012

補註 投稿後に、表2中の森彬が和歌山出身の歴史・民俗研究者で高校教員として小山譽城氏ら多くの研究者を育て、かつ御坊文化研究会で地域史研究を実践したことを知った。父は和歌山県市町村史の白眉といわれる『和歌山県日高郡誌』の著者森彦太郎である(森1923)。小山氏の証言によれば、森彬は「父に言われて国学院に進学した」と語っていたという。小山氏も国学院80期生であり、和歌山県出身の同窓であった。小山譽城氏、森順氏、小野俊成氏のご教示による。また清水1952を参照した。

本稿は、JSPS助成：課題名「西岡虎之助筆写史料紙背文書データベースの作成による1930年代歴史学界の人物相関」（課題番号21k00870）の成果である。

